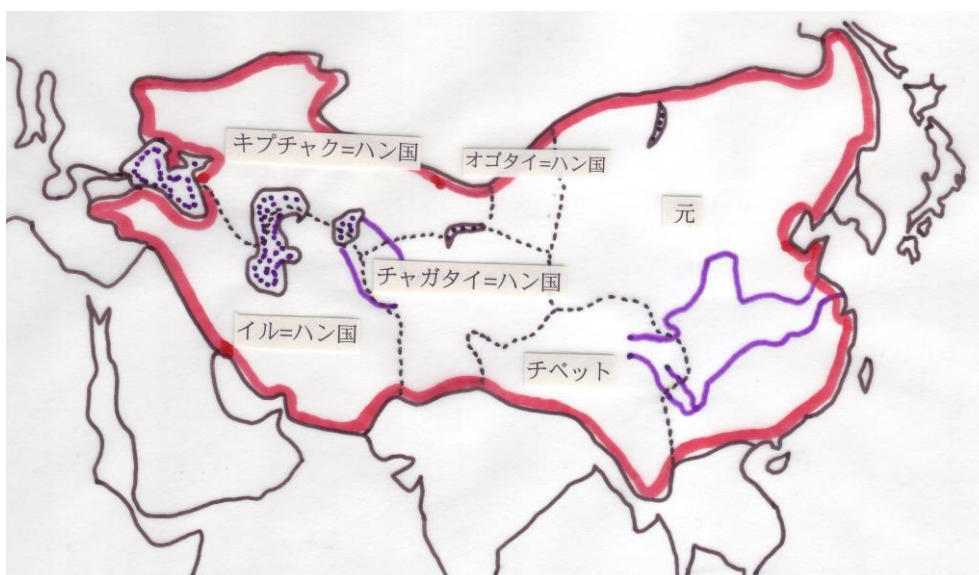


二言語併用貨幣 —イル・ハン国第4代アルゲン発行の銀貨—

吉池孝一

紀元前2世紀前半にインド西北の地においてギリシア系のバクトリア王国より、王名の属格を含む二言語併用の銘文を持つ貨幣が発行された¹。王名を含むところはマケドニアのフィリッポス2世以来のギリシア貨幣様式を継ぐものである。その後もこの地において同様の貨幣は発行され続けた²。この二言語併用という新たな貨幣様式はインド西北の地から周辺の地に伝播し、後代に伝わった。ここでは後代に伝わった二言語併用貨幣の一つとして、古代文字資料館が所蔵するモンゴル時代のイル・ハン国の貨幣を紹介する。



イル・ハン国は13世紀中頃から14世紀にイラン方面に栄えた国。ここに紹介する銀貨は、第4代アルゲン(在位1284-1291)の発行したものである³。銘文の判読のため、やや斜めの画像となっている。左には、縦書きで左から右にモンゴル文字(ソグド系文字)・モンゴル語で qayan-u(カーンの)、nereber(名において)、argun-u(アルゲンの)、deledkegülig-sen(打たせ

¹ ヒンドークシュ山脈を越えてインドの西北に進出したデメトリオス1世の息子には、デメトリオス2世(前180-前165)、アガトクレス(前180-前165)、パンタレオン(前185-前175)の三人がおり、それぞれの王名の二言語併用貨幣が発行された。デメトリオスとするものはギリシア文字とカローシュティー文字によるものであり前田耕作(1992:161頁)によるとこれは2世の発行に係るといふ。アガトクレス、パンタレオンとするものにはギリシア文字とブラーフミー文字によるものがある。

² イラン系の所謂インド・スキタイ朝、クシヤン族のクシヤン朝においてギリシア文字とカローシュティー文字銘文をもつ二言語併用貨幣が発行されたが、紀元後2世紀中ごろクシヤンのカニシカ王に到ってカローシュティー文字によるインド俗語(ガンダーラ語)の銘文は用いられなくなった。

³ 在位年はモーガン著/杉山訳(1993)による。

たる)とある⁴。なお-sen は上部に横書きされている。全体としては“カーンの名においてアルグンの打たせたる[貨幣]”とある。右には、横書きで右から左にアラビア文字・アラビア語で *Lā ilā Allāh, Muḥammad Rasūl Allāh*(アッラーの他に神なし、ムハンマドは神の使徒なり)とあるという⁵。両面金型を用いて打刻した円形の銀貨である。その銘文をみると、モンゴル語をモンゴル文字(ソグド系文字)で、アラビア語をアラビア文字で表記した二言語併用貨幣となっており、モンゴル文字の方には王名の属格が含まれている。このことよりみてギリシア系バクトリア王国に発する二言語併用貨幣の様式が後代に伝播し、この貨幣に反映したとみてよい。もっとも図像がなく全面が銘文で覆われている部分は、偶像を嫌うイスラム貨幣の様式の反映である。



左



右

【参考文献（発行年順）】

前田耕作(1992)『バクトリア王国の興亡』(レガリス文庫)第三文明社。

デイヴィッド・モーガン著 杉山正明、大島淳子訳(1993)『モンゴル帝国の歴史』角川選書。

中村雅之(2005)「イル・ハン朝の二言語貨幣初探」『KOTONOHA』34,pp.1-4。

Mehmet Eti 氏のサイト「ILKHANIDS」<http://mehmeteti.150m.com/ilkhanids/index.htm>

⁴ Mehmet Eti 氏のサイト「ILKHANIDS」参照。

⁵ 中村(2005)参照。